
心像世界

こやマンボウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心像世界

【Nコード】

N0358P

【作者名】

こやマンボウ

【あらすじ】

人々の想像イメージによって支えられている心像世界。その中で戦う方法は単純。イメージしろ！そして、他人のイメージに飲み込まれるな！ただそれだけ。

これは、現実世界と心像世界を行き来する人々の話。

001 (前書き)

念いが描き 記憶が補完する

故に 不完全

「——つまり、力学的エネルギー保存則により、高さ*h*にあった物体*P*は、そのエネルギーを運動エネルギーへと転化するわけだが、実際には空気との摩擦熱が生じ——」

物理教師の催眠解説と共に、チョークが黒板を叩く音が響く。

穏やかな午後の荷ざしの下では、どんな授業でも一度くらいは欠伸をしてしまうものだ。

伸びをしようと左肩に手を置いたとき、チョークが折れた。

真ん中で折れたチョークは、黒板と反対方向へ飛ぶ。

回転が加えられたチョークは、一直線に俺を狙い打つ。

「——！」

左肩に置いた右手で薙ぎ払おうとするが、時すでに遅し。

弾丸と化したチョークが、俺の額を打ち抜いた。

「——るわけで、これは本来なら計算しないといけない。だがすでに知っている通り、その値は極小なので——」

担任はそう言って、黒板に書かれたグラフを指差す。

本日四つ目の授業は、眠くなる授業No.1の物理だった。半数近くのクラスメイト達が、それぞれ思い思いのお昼ねライフを満喫している。

季節は初夏。

入学当初は緊張していたクラスメイト達も、ゴールデンウィークを終えた辺りからは肩の力が抜けたようで、今では当時の面影はない。

黒板に目を移し、グラフを書き取る。

授業は聞いていないので、ノートだけとって、教科書を読む。

と、頭に紙くずが投げつけられた。

結構力を込めていたらしく、紙くずはバウンドして隣の席の奴に当たる。

居眠りをしていたそいつは起こしてくれたと勘違いして、礼を言っ
て、眠そうに目を擦りながら黒板を見つめた。

俺の席は教室の後から二つ目の所にある。そして、俺の後ろの列には机は一つしかない。

「はあ……」

ため息をついた直後、不意に蛍光灯の明かりが遮られた。

「――！」

咄嗟に体を倒し、椅子から転げ落ちる。

直後、何処から持ち出したのか、飛来した学生鞆が俺の机を襲った。

一回転して体性を立て直し、犯人を見据える。

「――！、ぐふっ……」

姿を捉える暇もなく、懷に拳を受ける。

人間技とは思えない威力を発揮した拳は、俺の体を教卓にまで吹っ飛ばした。

「何をしている？」

「へ？」

冷やかな目線を頂戴しつつ、自分の現状を認識する。

俺は一人床に転がっており、クラスメイト達は啞然としている。

立ち上がって席に戻り、しれっと鉛筆を握る。

周囲の目が痛かったが、絶えるしかないので絶えた。

ここ、ほうとく朋徳高等学校の授業は、午前四教科、午後二教科となっている。

昼休み、昼食をとり終えた俺は、いつも通りに指定された場所に來ていた。

目の前には第二体育館がある。

第二体育館は創立三十周年記念に造られた記念式用の体育館で、昼休みに立ち寄る生徒はいない。

時刻は午後一時。

昼休みは一時半までなので、今から三十分あるわけだ。

第二体育館の裏には隣の敷地の壁が迫っており、人が並んで二人通れるくらいの隙間がある。そこが今回の指定場所だった。

中を覗き込むと、先に來ていた呼び出し人が不満を告げた。

「遅い」

「あの一。今何時だと思ってる？ まだ一時だぞ。四限終わって
からまだ二十分しか経ってねーのに」

自身の正当性をアピールする。

四限目の授業が終わったのが十二時四十分。十五分で昼食を食べ
終え、即行ここに来たのだ。妥当な時間だと胸を張って言える。

「違うわよ。反応が遅すぎるって言ってるの」

呼び出し人であり、クラスメイトであり、さっきの授業で俺に紙
くずを投げつけてきた張本人でもある奔洞ほんどう智美さとみはそう言って、しゃ
がんで石を拾った。

そして無言で投擲する。

「あつぶねー」

軽やかにサイドステップを決めて石を回避する俺。

その様子を見ていた奔洞は、大きくため息をついた。

「駄目ね。ほんと、駄目だわ」

「いやいや、意味分かんないし」

「だから駄目なのよ」

再度、奔洞はため息をついた。

そして、一度ぎゅっと目を瞑って開くと、もう一度石を拾った。

「もう一度避けてみなさい」

そう言って再び投擲する。

俺は向かってきた石を避けるため、先ほどと同じようにステップした。

「ほーら簡単って、っう……」

横に避けた俺の腹に石は直撃した。それも、みぞおちに。

お腹を抱えて転げまわる俺を尻目に、奔洞は本日三回目のため息をついた。

「で、あんたはさっき、どうやって避けようとしたの?」

奔洞はそうやって俺の足元にある石を指差す。

「どうって、そりゃあ、まっすぐ飛んでくるんだから、その延長線から離れた所に——」

「あのねー」

奔洞は俺の足元の石を拾い上げた。

「これ何個？」

「一個」

「で、もう一度質問。どうやって避けようとしたの？」

「だから、飛んでくる石の軌道を予測して、その軌道上から離れるように——」

「こんの、あほんだら！」

奔洞の怒り声が響いた。

これが、俺、みちなが さくや道長昨也の現在の日常。

001（後書き）

こんにちは、こやマンボウです。

今回の話は非常に分かり難いものだったと思います。

話が進めば分かるようになるので、お付き合い下さい。

登場人物名に見覚えがある方もいるかもしれませんが、気のせいです（笑）。

002 (前書き)

念いが描き 記憶が補完する

故に 不完全

「いいかげんに覚えなさい！ もう二ヶ月よ！」

第二体育館裏に奔洞ほんどうの声が響く。

奔洞を直視できない俺は、足元に視線を向ける。

足元には何もない地面があるだけだ。

「そんなんじゃ『心像世界』で死ぬわよ」

「——んなこと言っても……」

正直言って実感ない。

「心像世界」は確かにここに広がっているというのに。

人の想像力は無限大だ。

人は、脳内で己の世界を自由に思い描くことが出来る。そしてそれは通常、自身の中にのみ存在すると認識されている。

だが、実際にはそうではない。

想像として蓄えられたイメージは脳内に蓄積される。そして、蓄積されたそのイメージは、絶えず無意識のうちに外界に発信されているのだ。

人間の脳が、人を人であらしめるのに必要とされている部分は一部ではない。残りの部分には一見無意味に見える能力が秘められている。

人間は思考する生き物である。人間は常に想像をし、そのイメージを蓄える。イメージは常に増え続け、人間の思考を補助する。

集団意識というものがある。テレパシーと言われているものがある。世界には、何もしなくても意思疎通ができていて、といわれる現象が数多く存在する。

それらは全て、脳から発せられたイメージの賜物であるのだ。

それらを統括する世界を、「心像世界」という、らしい。

奔洞がそんなことを言っていた。

「いい？ もう一度確認するわよ」

奔洞が実践練習を諦め、まずは知識をつけるようにと講義を開始する。

「私達は確かに、イメージしたことを『心像世界』で実現させることができる。

けど『心像世界』はイメージの世界よ。皆のイメージで成り立っている。だから、どんな想像をしても、物理的制約を受ける。

例えば、何もない空間から炎を生み出すのは一般常識に反するか、皆はそんなことはできない、というイメージを持っている。だから、『心像世界』でもそんなことはそうそうできない。

別に不可能ってわけじゃないわよ。力の強い者なら、そんな皆のイメージに左右されずに炎を出すこともできるわ。炎を出す物理的方法を知っていればね。でも、今は関係ないことだわ。

要は、『心像世界』では、一般常識に則ったイメージであればあるほど、実現が可能だということ。

まあ、これは理解できてるわよね。

で、ここからが問題。

『心像世界』での戦い方よ。

とにかく、これを覚えないと話にならないわ。

で、戦い方だけ。

さっきも言った通り、『心像世界』はイメージの世界よ。どんな動きをするにしろ、イメージする必要がある。歩いたり、息したりするのにもね。

だけど、あんたはそんなこと考えていないでしょ。

でも、『心像世界』で息もできるし、回転だってできる。それは、あんたが無意識にそれを当然のものだと想像しているから。

確かに、『心像世界』にいただけならそれでもいいわ。

でも、あんたは違うの。あんたはそこで戦うの。分かってるわよね？

で、元に戻るけど、『心像世界』で戦う方法は一つしかないわ。

イメージ。それだけよ。

さっきのいうと、まず、私は足元に沢山石があるのを確認した。

まあ、これについては、ここの生徒はここに石がたくさんあることは知っているので、そんなことしなくてもいいんだけどね。

とにかく、私は武器の存在が身の回りにある、という現実を叩き込んだ。

そして、あんたを『心像世界』に連れて行く。

『心像世界』はあんたも知った通り、現実と重なり合って存在している。皆のイメージを基盤にしているのだから当然よね。

皆がここにある、と知っている物はそこにあるし、ここにいる、と知っている物はそこにはない。自分はここにいる、ということを知

理解している人は、って、大体はそうよね。で、まあ、そういうわけ、皆ちゃんと『心像世界』に存在するわけ。

閑話休題。

飛んだ『心像世界』には、もちろん私の足元に石がある。

私が石を持ち上げたとき、あんたはこう思ったでしょ。

また投げてくるって。

その時点で駄目なのよ。そんなことをイメージしては駄目。

自分から相手のイメージを受け入れてどうすんのよ。

いい？

攻撃するにはイメージするしかない。

私がイメージしたのは石を投げる動作じゃない。

いや、もちろんそれもあるけど、メインはそれじゃない。

私がイメージしたのは、投げた石があんたに当たるところ。

確かにあんたは私が投げた石を見て、横に避けた。

それは、私が投げた石の軌道をイメージして、その延長上から避けようとしたんでしょう。

でもね。

あんたはすぐに完璧な石の軌道をイメージできるの？予想がつくのは、ある程度の時間が経ってからでしょ。

それじゃあ、遅いの。

あんたが石の軌道をイメージする前に、私はあんたに石が当たるところを意識的にイメージしたわ。

そう、ここがあんたと私の圧倒的な違い。

あんたは意識的にイメージしてない。

確かに、実際には投げられた石の軌道をイメージする方が理に適ってるわ。

けどね、『心像世界』で物を言うのはイメージ力よ。

どれだけ物理法則が邪魔をしようとも、それにイメージが惑わされなければ問題ないわ。

あんたはまず意識的にイメージすることを覚えなさい」

002（後書き）

今回は説明じみた話になってしまいました。

「心像世界」についてはまだまだ説明していかないことがあります。

003 (前書き)

念いが描き 記憶が補完する

故に不完全

放課後、帰宅部の俺は学校を出ずに、最終下校時刻まで図書室にこもっている。

といっても、別に勉強をしているわけではない。

かといって読書を楽しんでいるわけでもない。

特訓をしているのだ。

「心像世界」で一日でも早く戦えるようになるために。

「いい？」

『心像世界』は皆の空想の集合体であると同時に、共通意識の発信元でもあるの。

力を持つ者が『心像世界』にアクセスしたら、悪用することも可能なのよ。

だから、それを防ぐのが私の役目であり、今のあなたの役目でもあるの。

そこんとこ、自覚持つてよね」

奔洞ほんどうはそう言うが、俺自身としては、そんな気はさらさらない。

なのに奔洞の言う事を聞いているのには訳があった。

「おい、昨也さくや」

図書室を出てトイレに行ってきた帰り、みお 澪に呼び止められた。

みおみや 袁宮澪。

小学5年生からの付き合いである。

「昨也は帰るの？ 私は帰るけど」

「いや、最後まで残っていく」

「そう。じゃあ、私は一人で帰るね」

ここ、あまのはじ 天原高校は電車通学が基本の私立校で、俺と澪の最寄駅に
停まる電車は一時間に二本しかない。そのため、俺達はよく一緒に
帰ることになる。といっても、っ電車の中だけだが。

腰まで伸びた、今時珍しい長髪を揺らして、澪は背を向ける。

「あ、そうそう」

振り向いた漣は右手を差し出した。

「どうした？」

「五百円貸して。定期無くしちゃって……」

てへっと笑う漣に、俺はポケットから取り出した１０円玉のストッケースを手渡す。

「五十枚で五百円あるはずだから」

「いやいやいや、１０円を五十枚って。」

というか、同じ種類の硬貨は、二十枚以上なら拒否されるのよ」

「拒否する権利があるだけだぞ。」

俺は１円の５０枚でやったことあるし」

「あんた何やってんの？」と驚いた顔の漣。

「それが無理なら返してくれ」

「いやいやいや。ありがたく貸して頂きますよ」

「遅かったわね」

図書室に戻ると、奔洞は遅れた理由を聞いてきた。

「外で漣に会って」

「漣？　って誰？」

怪訝そうな顔をする奔洞。

「ほら、俺の幼馴染。何回か会ってるだろ？」

「そう？　まあ、別にどうでもいいけど」

奔洞はそう言って、「続き」と俺を急かす。

「分かってる」

「いや、分かってない。」

「いい？」

あんたには強くなってもらわないと困るの。

このままだと、戦線に立つのに一年は掛かるわよ」

「そんなこと言ってもさー」

俺は少し本音を漏らす。

「なんていうかさー。実感がないわけ。」

そこまで必死こいてやることなのかな？って」

それを聞いて、奔洞は大きくため息をついた。

「あんだねー」。

自分の身の危険性を考えてないでしょ」

「身の危険？」

——はて？ そんな話初めて聞いたぞ。

「当たり前でしょ。」

『心像世界』を操って世界征服とか目指している奴らに狙われで
もしたらどーすんなよ」

「世界制服って。」

今時そんな目標かかげる悪の秘密組織なんていねえーだろ」

「要は、いい人間以外にも、悪い人間がいるということよ。」

お分かり？」

「じゃあ、俺が戦うのもその悪い人なのかよ？」

「当たり前でしょ。他に誰がいんのよ？」

今度はこちらがため息をつく番だった。

「何ため息なんてついてんのよ」

——そりゃあ、悪の秘密組織と戦うのじゃ、とか聞かされたらな—

「とにかく。」

今はステージに立つことだけを考えてなさい。

今のあんたじゃ戦力外どころか、ただのお荷物よ」

「無能」だと告げる奔洞。

俺はがつくりうな垂れる。

——どっかの部活に入ればよかったかもな。

そんなことを思いながら、今日の特訓

「それじゃあ、今日はこれを読みなさい」

そう言って手渡されたのは物理の新書だった。

題名は「私と宇宙・なぜ私はここに在るのか」。

「……………」

「何してるの？ さっさと読みなさい」

「いやいやいや。これ無理だろ。」

こんなの読んでも分かんねーよ」

「分からなくてもいいの。」

雰囲気を掴むのよ。

とにかく読みなさい」

「いや、だから、その雰囲気も掴めねえって言うてんだよ。」

無理だろ。常識的に考えて」

——てめえの存在なんて知るか。そこにいるからそこにいるんだろっが。

「私と宇宙・なぜ私はここに在るのか」の作者を批判する。

「——そう。読めないっていうわけ」

奔洞が声のトーンを落とす。

「だったら、読みたくなるまで死んでみる（『心像世界』で）？」

「ありがたく読ませていただきます！」

俺は「私と宇宙・なぜ私はここに在るのか」を開くと目を通した。

「あら、いやならいいのよ。」

その身に直接叩き込んでやるだけだから」

「いやいやいや。」

まずはこの本で勉強させてもらいます」

「そう。」

なら体罰はその後ね」

——体罰？ 体罰って言ったよこの人。

俺が奔洞に従っているのには理由がある。

時は四月にまで遡る。

俺が奔洞に初めて会った日。

その日は春風が吹き荒れる、風の強い日だった。

003（後書き）

3話目です。

なかなか時間が掛かってしまいました。

新たに登場した新キャラもありますが、序盤は出番が少なそうです（後にちゃんとスポットライトが当たりますよ）。

次回はファースト・コンタクトです。

004 (前書き)

念いが描き 記憶が補完する

故に不完全

高校生最初の登校日。

入学式という通過儀礼を終えた俺は、帰路につこうとしていた。

「遅くなっ たかなー」

トイレで手を洗いながら呟く。

漑みおの両親は共働きで、技術者として世界中を飛び回っており、今日も出張だった。

そのため漑は俺と一緒に来ることになり、同じ車に乗ってやってきたのだ。

もちろん帰りも同様で。

途中で便意に襲われた俺は、校門で漑を待たせているのだった。

「おおっ、さむっ」

春風に身をあおられながら、俺は校舎を出て校門へと歩く。

校舎から校門までは少し遠い。

途中に第一、第二体育館を挟んでいるからだ。

そちらのトイレは親御さんで溢れていたため、俺は已む無く校舎

のトイレを借りることとなったのだった。

「桜、咲いてないな」

今年の春は非常に寒く、今だ二月下旬並みの気温を保っている。

——けっきょく、何もなかったな。

校舎を見上げて失意に暮れる。

高校生になったら何か変わらないかなと思っていた。

けど、そんなことはないと分かっていた。

異世界に飛ばされることもなければ、裏社会の戦いに巻き込まれることもない。

大体、例えそんなことが起こったとしても、俺では主人公にはなれないだろう。

これといった特技もなく、暗い過去も持たず、平凡で、かつ幸せな家庭に恵まれる俺では。

「俺にあるのは、妄想力だけだもんな」

第一体育館の角を曲がる。

風が吹いた。

冷気が当たって、目を細める。

と、どこかで金属が打ち合う音が聞こえてきた。

「ん？」

音の出所を探して首をきよるきよるさせると、さきほど出てきた校舎の屋上に人影を発見。

二人の生徒が屋上で打ち合っていた。

「っな……」

ダッシュで校舎へ戻る。

これぞ求めていた非日常。

高鳴る鼓動を感じながら、階段を上がる。

不安はない。

湧き上がる衝動があるのみ。

俺は屋上へと繋がる扉を押し開けた。

春の日差しが降り注ぐ中。

冬の風に髪を靡かせ。

金属製定規を構えた彼女は。

不敵な笑みで獲物を見ていた。

一瞬、少女と退治する少年が驚きの表情を見せた。

その隙に、少女は少年の懷に潜り込む。

慌てて得物である金属バットを振り下ろす少年。

刹那。

金属特有の接触音の後。

金属バットが真つ二つに折れた。

今度こそ驚愕を隠せない少年に。

少女は笑みを浮かべて。

定規を突き刺した。

「ぐわわあああああああああああああああああああ
」

悲鳴を上げたのは少年でも少女でもなく。

他ならぬ俺自身だった。

貫かれた左目が痛みを訴える。

言葉では表現できない、この世の痛みを全て合わせた痛みが俺を
貫く。

だが、血は出ない。

左目の視力も無事。

肉体的ダメージは負っていない。

なのに。

痛い。

俺の悲鳴に気づいて少女が振り向いた。

——危ない……。

少年が最後の力を振り絞って、少女の足に噛み付いた。

「つく……」

苦痛に顔を歪ませて、少女は少年を振り払う。

止めとばかりに、少女は少年を蹴飛ばして、俺の元にやって来た。

痛みに耐えられなくなって、そこで俺の意識は途切れた。

目を覚ましたのは、第一体育館の隅だった。

左目を恐る恐る触るが、何ともない。

痛みも退いていた。

時計を確認する。

俺がトイレから出て数分しか経っていない。

「とにかく戻ろう」

いろいろ思うところはあるが、目の前の問題から片付けることにした。

「遅いよー」

校門で待っていた澪が、俺の姿を見つけて手を振る。

「ごめん、ごめん」

俺は校門を出ようとした。

「何かあったの？」

ふと、澪が心配そうに聞いた。

「え？ 何で？」

「唇、真っ青だよ。」

それに、気づいてないのかもしれないけど、さっきから体が震えてるよ」

「——ちょっと寒かったただだよ……」

翌日、俺は上の空で授業を聞いていた。

昨日のあれは何だったのか？

現実か？

それとも、無意識の内の妄想か？

——それだつたらやべーよな。

元々、妄想をすることはあったが、それはあくまで意識してやっていたものだ。

もしそれが無意識の内に行われるようになったのなら、病院にいかなくてはならない。

——妄想癖はな！。

ふと、頭に何かが当たった。

落ちた物を見ると、消しゴムだった。

「ん？」

一応、拾っておく。

腰を屈めようとしたとき、俺の前に生徒の誰かが立っているのに気づいた。

——え？ 何で誰も何も言わないんだ？

教師は何も言わず、授業は滞りなく進んでいく。

俺は顔を上げた。

予感があった。

もしあれが本当なら、近いうちに再開するんじゃないかって。

そうして俺は、向こう側へ行けるんじゃないかって。

彼女は俺が自分の存在に気づいたことに気づくと、不敵に笑って。

「じっんの——」

拳を固め。

「——あほんだらー!」

俺の顔面に叩き付けた。

これが俺と奔洞ほんどうの最初の出会い。

「心像世界」への扉だった。

004（後書き）

4 話目です。

久しぶりの更新となりました。

結局、道長が奔洞に従う理由が出てきませんでしたね（笑）。

次回は現代に戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358p/>

心像世界

2011年10月6日13時14分発行